

研究報告
(研究プロジェクト)

メダリストへの軌跡 —河野 昭 選手—

清 宮 孝 文 (スポーツ社会学研究室)
依 田 充 代 (スポーツ社会学研究室)

本稿は、「研究プロジェクト：日体大とオリンピックの関わり」の一環として実施した、メダリストへのインタビューをもとに構成されている。

本インタビューは平成28年11月4日(金)に行い、河野昭氏は故人のため、遺族の河野大助氏にお話を伺った。

【経歴】

- 1951年 日本体育専門学校卒業
- 1951年 日本体育大学助手
- 1960年 愛媛大学講師
- 1964年 愛媛大学助教授
- 1974年 愛媛大学教授

【競技歴】

- 1952年 全日本体操競技選手権大会 男子種目別あん馬 優勝
- 1953年 全日本体操競技選手権大会 男子種目別あん馬 優勝
- 1956年 第16回メルボルンオリンピック大会 体操競技団体総合2位
- 1957年 全日本体操競技選手権大会 男子種目別あん馬 優勝
- 1958年 世界体操競技選手権大会 男子種目別あん馬 4位

第16回メルボルンオリンピック大会体操競技団体にて、日本チーム6人の中の一人として銀メダル獲得に貢献した河野昭氏は、1929年9月11日、愛媛県宇和島市で生まれた。現役時代は、「あん馬の河野」と呼ばれ、全日本体操競技選手権大会では、男子種目別「あん馬」において、3度の優勝を果たしている。オリンピックでありながら、温厚な性格の河野昭氏は、現役時代を終えると大学の教員として未来のオリンピックの指導に尽力した。定年までの間、大学で教鞭を取りながら、日本体操協会理事、愛媛県体操協会会長を歴任し、日本の体操競技の発展に情熱を燃やしてきたが、

1995年66歳という若さで心筋梗塞のため永眠した。オリンピック体操競技において日本初のメダル獲得に貢献した河野昭氏の人生について、同氏ご長男の河野大助氏にインタビュー調査を行った。河野大助氏は現在、松山城南高等学校の校長を務めている。

1. 体操競技との出会い

1930年代当時、世間ではまだ遊具も少なく、河野氏は幼少期から鉄棒で遊ぶ機会が多かった。こうした経験から宇和島で行われた小学校や中学

校の体操競技大会ではいつも優勝をしていた。また、河野氏自身も「体操に関しては宇和島市内では自分が一番うまかった」と語っていたという。

終戦頃に予科練の経験がある河野氏は、今は宇和島市の中に入ってしまった吉田町にあった吉田高校で代用教員として、1年間勤務していた。それから1年遅れで当時の日本体育専門学校（現：日本体育大学）に入学した。体操競技にのめり込んだのはこの頃からだった。

生まれも育ちも宇和島である河野氏は当時、体操競技が日本で一番上手いぐらいの感覚でいたが、上京すると周りの競技レベルが非常に高く、「何世紀前の技をしてるんだ」と言われ、強い衝撃を受けた。しかし、河野氏は東京で結果を残すまで宇和島に帰れなかった。なぜなら、河野氏はクリーニング屋の長男として、クリーニング屋を継ぐことが使命であったが、父親が「そういう夢をかなえてやったらええわ」と言ってくれ、大学に進学できたからである。

このような経緯から、大学に行くことに関しては他の兄弟の犠牲もあり、「大学に行かせてもらった」という思いが強く、河野氏は「長男として無理を言ってまで東京に行かせてもらって、結果を残すまでは帰れない『背水の陣』という気持ちがあった」と述べている。

また、河野氏が体操のオリンピック選手になるために最も影響を与えたのは、竹本先生との出会いであった。竹本先生とは、日本体育大学出身で日本体育大学名誉教授、現役時代にはローマオリンピック男子体操競技団体で日本の金メダル獲得に大きく貢献した体操選手である。竹本先生と一緒に技を練習することにより、実力をつけ、オリンピックへと成長を遂げていった。

2. 日体大の思い出

日本体育専門学校への進学を決めた理由は、宇和島中学校で体育の教員だった中井先生の影響であった。その先生は、宇和島中学校で体操競技部

の顧問をしていた。

大学に進学した河野氏は誰よりも体操競技の練習に取り組んだ。日体スワロー所属で相模工大の教員をしていた上野先生は当時のことを「河野は雨の日に傘をさして鉄棒の練習をしていた」と話しており、このような逸話が残るほど河野氏の練習熱心な姿は誰もが認めるところであった。

そこまで練習に明け暮れたのは、鉄棒では自分が一番上手いと思っていたが、実際に東京へ行くと自分ぐらいの実力の選手が多く存在し、自分が世間知らずであったことを思い知らされたからである。大学に行かせてもらったという思いが強かった河野氏は、成績を残そうと必死に努力した。

河野氏が日体大を語る時に一番に出てくる話は、竹本先生と栗本学長（河野氏が在学時の日本体育専門学校学長）との話である。当時の日本体育専門学校は、現在の日本体育大学と比べ、小規模であったため、世界的な大会への出場などによりアスリートとして名が知られてくるようになると、学長からも呼ばれ、食事をご馳走になるなどの個人的な付き合いがあったようだ。

また、在学中は大学の寮で生活し、大学卒業後には助手の職に就きながら寮監の仕事も行い、大学4年間と助手の期間を合わせ、長い間、大学の寮で生活をしていた。

また、日本体育大学の助手として勤務している時に結婚した。結婚相手は、高校を卒業して1年間代用教員を務めていた吉田高校で出会った女性と遠距離での交際を重ね、結婚後は東京の三軒茶屋に住み始めた。

この頃、宇和島市から日本体育大学に進学した山下治廣氏の面倒をよくみたと河野氏は語っていた。山下治廣氏は、跳馬を得意とし、1964年東京オリンピック大会では個人種目別跳馬と男子団体総合において金メダルを獲得した体操競技の選手である。この山下治廣氏に対して河野氏は、家に招き夕飯をご馳走するなど、とても世話を焼いていた。河野氏は次男に、山下治廣氏の名前と同じ「治広」を付けた。それだけ、凄い選手になっ

てくれたという河野氏の喜びが垣間見れる。

3. オリンピックでのメダル獲得

メルボルンオリンピック大会は、河合（1963）が「第十六回のオリンピック大会は一九四九年のIOC総会でメルボルンと決定したのであるが、この決定は南アメリカ、アルゼンチンのブエノスアイレスと接戦となり、二一票対二〇票というわずか一票の差で獲得したものであった」¹⁾と述べているように接戦の末、開催が決まったオリンピックである。また、秋山（1962）はメルボルンオリンピック大会について「ソ連が仲間入りしてオリンピックのグローバルな意義が一段と高まったのは事実だが、同時に米ソの『冷戦』を背負った世界情勢が、純粋なスポーツの祭典に複雑な人間模様を持ち込んだのも確かなことである。その最も露骨な現れが1956年度のメルボルン大会」²⁾と論じている。このように世界情勢が不安定の中、河野氏を含め、日本選手団はメルボルンへと向かった。

さらに、アベリー・ブランデー（1974）が「メルボルンは遠い国からは一万マイルも離れているうえに南半球に位置しているため、オリンピックでは多数派である北半球の人々にとって必然的にオフ・シーズン（大会は十一月開催）に行われることになり、この点に不安があった」³⁾と述べており、日本を含む北半球の国にとっては幾分不利であった。しかし、その環境下の中、日本体操男子メンバーは団体競技においてソビエトについて2位の成績を収めた。

この体操界の快挙を達成した6人のメンバーに入っていたのが河野氏である。河野氏は、1952年、1953年、1957年と全日本体操競技選手権大会男子種目別あん馬で優勝し、1958年には世界体操競技選手権大会男子種目別あん馬で4位入賞を果たし、その競技成績から「あん馬の河野」と呼ばれた。河野氏のご長男大助氏は、「手が長く、日本人離れした体型だったため、あん馬に比較的向

いていたのだろう」と語っている。

メルボルンオリンピック大会への出場は、1956年全日本体操競技選手権大会男子個人総合で3位を獲り、メンバー入りが決まった。メルボルンオリンピック大会での体操男子団体のメンバーは、日本体育大学の相原信行・竹本正男・河野昭、東京教育大学の小野喬・久保田正躬・塚脇伸作の6人であった。

しかし、河野氏はオリンピックでベストパフォーマンスができなかったことを後悔していた。それは、オリンピック大会前の全日本体操競技選手権大会において個人総合3位と好成績でありながら、オリンピック大会では個人総合16位と日本勢の中で最下位の成績であったからである。

これに関して河野氏は広報「松山」の中で「メルボルンオリンピックでは、日本が体操競技で初めてメダルを獲得した。しかし、私自身は地元や周囲の人たちの期待に応えなくてはというプレッシャーに負けたんでしょね。不本意な成績に終わり、悔いの残る大会でした」と語っている。

4. その後の人生

1958年に世界体操競技選手権大会男子種目別あん馬で4位入賞を果たした河野氏は、1960年ローマオリンピックの日本代表になることを目指して競技を続けていたが、肩の怪我の影響で代表から落選した。それを機に現役選手を引退し、故郷の愛媛県に戻り、愛媛大学で、体育実技の教員として36年間勤務した。1964年には講師から助教授に就任し、1974年には教授へと昇進した。さらに、役職は、愛媛県体育協会理事長や日本体操協会理事など多岐にわたり、未来の体操競技のために尽力した。

また、9人兄弟の一番下の弟である河野泰治氏には、河野氏が直接体操指導にあたった。河野泰治氏は、河野氏の19歳下の弟で、松山市内の新田高校に通っていた。その新田高校の体操部で河野氏はその弟を預かり、体操部を強くしていった。

結果的に、河野泰治氏はインターハイ個人総合3位を獲得し、国民体育大会では優勝を果たした。その後、河野氏と同じ日本体育大学へと進学し、同大学体操競技部でレギュラーを務めた。

河野氏の教育方針は、やる気がない生徒に対しては強制することがなく、あくまでも生徒の自主性を尊重するというものであった。ここに河野氏の穏やかな性格が出ており、ご長男の河野大助氏は「怒ったところをあまり見たことがない」と語っている。

その他にもラグビー部の部長に就任したことがあり、家に持ち帰ったラグビーボールに興味を持ったご長男河野大助氏は、高校時代に全国高校ラグビー大会（花園）への出場を果たし、その後父親の母校である日本体育大学に進学しラグビー競技を継続した。河野氏のラグビー部の部長経験は、ご長男に大きな影響を与えたと言えよう。

1995年3月に定年退職し、そのわずか9か月後、日本の体操界に初めてオリンピックのメダルをもたらした河野氏は、66歳という若さで他界した。1995年12月25日、心筋梗塞による急死であった。ご長男の河野大助氏は、「うちの嫁とか弟の嫁とか弟は突然の死で取り乱しとったけど、自分は何かこう、ちゃんとせないかんという気持ちがあつてね。僕自身は割と淡々としとったよね。しかし、おふくろが一番つらい思いをしたね。何にも言わずに死んでしまうたから、それはしばらくおふくろは言いよったね」と当時の状況を語ってくれた。

5. ご遺族から見たオリンピック選手である親について

河野大助氏は、父親については物心付いたときにすでに現役を引退していたため、オリンピック選手という姿は見たことがなくイメージもできなかったが、近所の公園などで鉄棒をしてくれる機会があり、父の演技に周りの人が驚いていたのを覚えている。また、子どもたちへの体操競技の押しつけが全くなく、大助氏は周りの人に、「何で

あなたは体操しなかったんですか」とよく聞かれたと語ってくれた。

愛媛県内の誰に聞いても河野氏は、面倒事を人に押し付けることはなかったという。実際に大助氏が県の採用試験を受けた時も関係の方々に「あんたとこのおやじが一言頼んどきゃ何とかなるのに、それをあんたとこの親父はせんのかなあ」と言われた。河野氏は、ルールを厳格に守り、相手の立場を尊重するという人だった。

また、大助氏は河野氏のイメージとして、体操の時の厳しさも見たことがないため、家庭でいつもの定位置のソファに座ってテレビ見ているというイメージしかないとも言っていた。しかし、河野氏の息子として恥ずかしかった話があると言い、「日体大の入試に行ったときに、徒手体操に近いような試験があったんですよ。そのときに千葉吟子先生が教官か採点者でいらっしやっただすけど、河野昭の息子の割には何にも体操の技ができませんのでね。恥ずかしい思いをしたような記憶はあります」と語ってくれた。

今回のインタビューを通して、河野昭氏のお人柄に触れることができた。現役時代には誰よりも練習し、指導者としてはルールに厳格で相手の主体性を引き出すなど、河野昭氏は人格者であり、魅力ある指導者であったことがわかった。

メダリストの軌跡－河野昭選手－のインタビューに答えてくれた、ご長男の河野大助氏に心から感謝してインタビューを終えたい。

注及び引用参考文献

- 1) 河合勇（1963）オリンピックの歴史。白水社：東京，192.
- 2) 東竜太郎（1962）オリンピック。オリンピック余話，秋山如水。わせだ書房：東京，43.
- 3) アベリー・ブランデー著・宮川毅訳（1974）近代オリンピックの遺産。ベースボール・マガジン社：東京，217.

（受理日：2017年2月24日）

